

満点	120点	目標得点	84点	試験時間	150分	偏差値	文I 76 文II 75 文III 74
大問数	4 (現代文2・古文1・漢文1)	選択式	0/20問	小問数	20	記述式	20/20問
[解答形式]							
[難易度]	C	0/20問		B	5/20問		A
							15/20問

※問題難易度：C難問、B可否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す

Topics

- 1…現代文・古文・漢文とも、すべて基礎的な読解力と思考力さえ備わっていたら解くことの可能な良問ばかりである。些末な知識や受験特有のテクニクなどが求められる問題は皆無である。
- 2…選択肢の設問は一つもなく、すべて記述式で解答しなければならぬ。しかも解答欄が、とても小さい。東大が求めているのは、あらゆる要素を詰め込んだ冗漫な解答ではない。問題文の構造や論旨をふまえ、その言わんとしていることを簡潔にまとめた解答である。これが難しい。東大に合格する読解力や思考力をたとえ身につけていたとしても、それを小さな解答欄に表現する力が備わっていないと得点することはできない。東大に合格するためには、解答を簡潔にまとめる表現力の養成が最も肝要であり、また最も困難でもあると言えよう。
- 3…東大の問題を解くためには、特別な知識は必要ない。しかし問題文の背景までをも読み取る「教養」があれば、よりよい解答になる設問も少なくない。現代文・古文・漢文の表面的な知識ではなく、一見不必要にも見えかねない、背景を感受することのできる「教養」を身につけることにも、力を注いでいくべきだろう。

「こんな力が求められる!」

二次試験重視とはいえ、どこを志望するにせよ、センター試験では85%以上の得点が欲しい。『センター国語』をはじめとする国語科の教材に収録されているセンター試験の問題を通して現代文・古文・漢文のそれぞれの解法をしっかりと理解し、その上でひたすら演習を繰り返さなければならない。センター試験の国語は、決して簡単ではない。東大を志望し、東大に向けた国語力を着実に養成してきた受験生であっても、センター対策を疎かにすると痛い目に遭うこと必至だ。着実な対策と十分すぎるくらいの演習が絶対に必要である。

二次試験については、読解力・思考力・表現力といった、総合的な国語力の養成が求められる。言うまでもなく、これらの能力が一朝一夕に身につくはずがない。常日頃から、東大入試を想定した良質な問題文と格闘することで読解力と思考力を鍛錬し、読み取った内容を簡潔にわかりやすく表現していく力を練り上げる必要がある。『OS東大国語』の教材には、東大に合格するために必要な国語力を養うべく、選りすぐりの問題文が収録されている。また各問題には、東大入試を想定した解答用紙が用意されており、毎週担当講師に提出し添削を受けなければならない。東大が求める国語力とは、すなわち予習復習を含めたOS東大国語の授業内容そのものと言ってよい。

大問別分析

【第一問】

予想配点	40/120点	時間配分の目安	50/150分
文章の種類／ジャンル	現代文・古文・漢文／ 評論・随筆・小説・物語・詩歌・その他		
【出典】	原研哉『白』（中央公論新社、二〇〇八年五月）所収、 第四章「白へ」のうち「推敲」「白への跳躍」の全文。		
【文字数】	約二七〇〇字		
出題形式	漢字以外は全て記述式		
小問別難易度	※問題難易度：C難問、B可否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す		
(一) A	(二) B	(三) A	(四) A (五) B (六) A

●内容分析&解答のポイント

(一)

【解答例】

白い紙に記されたものは不可逆であるから、未成熟な表現にならないよう、言葉の微細な差異にまで執着するということ。

【内容分析】

東大入試のレベルに鑑みるとA(正答すべき問題)ランクと考えられるが、決して簡単な設問ではない。まず傍線部直前にある指示語「これ」の内容が把握しにくい。直前の三文「月あかりのく印象づけているかもしれない」が一般論であることを見抜き、指示語がその前にある、「有名な逡巡」を指していることを捉えたい。とすれば、傍線部の「人間の心理」とは、すなわち「選択する言葉のわずかな差異」を意識してしまふ心理ということになるだろう。あとは「定着」あるいは「完成」という状態が、「白い紙」に特有の「不可逆」で「後戻りが出来ない」という「訂正不能な出来事が固定される」状態であることをまとめればよい。

(二)

【解答例】

消去不可能だから白い紙に未熟な表現を残すまいとする感覚が、表現を磨き上げようとする美意識をもたらしただけのこと。

【内容分析】

傍線部直前の「このような」という指示語がある。したがって「達成を意識した完成度や洗練を求める気持ち」が、「不可逆性が生み出した営みであり美意識」である「推敲」を意味していることは捉えらるだろう。それに対し「白という感受性」の説明が難しい。次段落が具体例を用いた説明であることをふまえ、「白い紙に消し去れない過失を累積していく様を把握し続けること」という一節に気づけるかどうか。気づいたとしても、それを「白という感受性」の説明に相応しく、噛み砕くことができたかどうか。「消し去れない過失を累積していく」ことに「呵責の念」を感じてしまうことこそが、「白という感受性」なのである。その上で、これら要素をどのように解答欄にまとめるかが、また簡単ではない。「□□□の背景に、△△△が潜んでいる」ということを、どう説明すればよいのだろうか。傍線部の表現そのままに、「□□□の背景に、△△△が潜んでいる」ということと説明しようとしても、おそらく解答欄をはみ出してしまふことになるだろう。解答例では、「△△△が□□□をもたらしただけ」という方向でまとめてみた。表現力も試されている東大らしい設問といえよう。

(三)

〔解答例〕

白い紙に消すことの出来ない過失を累積したという呵責の念が、清書や仕上げという価値観や美意識を生み出したということ。

〔内容分析〕

傍線部直前の「この」に注目すれば、「推敲という意識をいざなう推進力のようなもの」の説明は、さほど困難ではない。「推敲という美意識を加速させる」のが「白い紙に消し去れない過失を累積していく様を把握し続けること」とあるのだから、「消去不可能な過失を累積してきたという自責の念」などとまとめればよい。それに比して、「紙を中心としたひとつの文化」の説明がやや難しい。傍線部直後の一文から、「無限の過失をなんの代償もなく受け入れ続けてくれるメディア」(＝インターネット)と「推すか敲くかを逡巡する心理」が対比関係にあることをふまえれば、前者には存在しないといわれる「清書」や「仕上がる」というような価値観や美意識」が、「紙を中心としたひとつの文化」の説明であることに気づけるだろう。

(四)

〔解答例〕

個人が仕上げ完結させるのではなく、インターネットの知は変化する現実に応じて無数の人々が無限に加筆訂正するものだということ。

〔内容分析〕

今年度の第一問において最も解答の作りやすい設問である。傍線部のある段落で述べられている、「白い紙」が生み出した知とインターネットによってもたらされた知の違いをふまえてまとめればよい。傍線部内に「文体を持たない」という一節も含まれていることから、「ニュートラルな言葉で知の平均値を示し続ける」インターネットによる知だけでなく、「文体」を持つ「白い紙」特有の知についても、説明しなければならない。

(五)

〔解答例〕

訂正不能な出来事を定着させる不可逆性を有する白い紙は、情報を仕上げ完成させて決然と明確に表現しようとする意識を生み出したが、それが失敗への危険に臆することなく潔く表現する意識をもたらし、諸芸術の感覚を鍛える暗黙の基礎となってきたということ。(二二〇字)

〔内容分析〕

二〇〇〇年度以降、東大入試の現代文では定番となった、一〇〇字～一二〇字という字数を指定された内容説明の問題である。傍線部の内容を把握した上で、それを本文全体の論旨と絡めて説明しなければならぬ。今年度は傍線部が修辭的であるがゆえに、例年に比して、内容の把握にやや戸惑ったかと思われる。

「二の矢」に依存することなく、「矢を一本だけ持つて的に向かう集中」とは何を意味するのか。傍線部が最終段落で言及されている『徒然草』をふまえた一節であり、その『徒然草』が前段落の内容を受けて引つ張り出されていることに注意したい。そうすれば、「矢を一本だけ…」が、前段落における諸芸術の営みと関連していることに気づくことができる。すなわち「矢を一本だけ…」という一節は、「失敗への危険に臆することなく潔く発せられる表現」という部分と対応しているのである。さらにその意識が「諸芸術の感覚を鍛える暗黙の基礎」となってきたことをふまえれば、傍線部の内容説明は完了である。

ついでその説明を本文全体の論旨と関係づけなければならぬ。内容説明に比べると、こちらの方は、さほど難しくはない。「失敗への危険に臆することなく潔く発せられる表現」が、「白い紙」によってもたらされた意識によってもたらされたものであることを読み取るとは、容易なはずだ。「白い紙の上に決然と明確な表現を屹立させる」営みが、その表現を生み出したのである。あとは「後戻りが出来ない」不可逆性を特性とする「白い紙」によって促された「仕上げ」「完成」させる意識が「潔く発せられる表現」

につながることを、わかりやすく字数内にまとめればよい。

(六)

【解答例】

a 吟味 b 器量 c 真偽 d 回避 e 成就

【内容分析】

簡単。『漢璧』で普段から漢字の勉強を怠っていないければ、全問正解できるはず。

【第二問】

予想配点	30/120点	時間配分の目安	30/150分
文章の種類／ジャンル	現代文・古文・漢文／評論・随筆・小説・物語・詩歌・その他		
【出典】『うつほ物語』のうち、「嵯峨院」の一部。			
第一段落と第二段落の間に省略されている部分があるが、例年通り丁寧な注も付されており、解答を考える上で、特に問題となることもなかった。			
【文字数】約八四〇字			
出題形式	記述式		
小問別難易度	※問題難易度：C難問、B合否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す		
(一) A	(二) A	(三) A	(四) A (五) B

●内容分析&解答のポイント

(一)

【解答例】

ア 管弦の遊びをして大騒ぎする／にぎやかに管弦の遊びをする

ウ 私はどうしてこの御簾の中を見てしまったのだろうか

エ 浮気心を持ってとお思になるのか／浮気者でいると思っていらいっしやるのか

【内容分析】

ア 基本単語「遊ぶ」と「のしる」を訳せばよい。「のしる」は、本動詞と考えても補助動詞と考えてもよい。

ウ 「何にせむに」の訳に注意すればよい。「どうして」の他にも、「何のために」「なぜ」などと訳してもよい。あからさまに反語と解釈して「見ないほうがよかった」などと訳しても間違いとは言えないが、傍線部は少将が自問している箇所であるから、反語とも解釈可能な疑問形で訳しておいたほうが無難である。「つ」は完了の助動詞、「らむ」は原因推量の助動詞。

エ 基本単語「あだなり」の命令形、「あだなれ」の解釈にやや工夫が必要である。直訳して「浮気である」ではおかしいので、解答例のように「浮気心を持って」や「浮気者でいる」などとすればよい。「や」は疑問の係助詞、「おぼす」は「思ふ」の尊敬語。

(二)

【解答例】

容姿の美しさにおいて、この上なく劣って見える

【内容分析】

問一に引き続き現代語訳の設問。しかし問一と異なり、「必要な言葉を補って」訳していかなければならぬ。とはいえこの傍線部の現代語訳では、「こよなし」の解釈に注意すればよいだけ。「限りなくめでたく見えし君たち」も、「このいま見ゆる」あて宮(九の君)と比べると、劣って見えてしまうことを明確にして訳出すれば十分である。解答欄が余ってしまうことに不安を覚えるのなら、解答例のように「容

姿の美しさにおいて」などを付加すればよいだろう。単に「劣って」いると訳出するよりも、才能でも身分でも性格でもなく、「容貌容姿」が「劣って」いると限定したほうが、いっそう文脈をふまえた現代語訳となるからである。

(三)

〔解答例〕

仲頼があて宮を恋い慕うあまり、思い悩み頭も上げずに寝込んでいる様子。

〔内容分析〕

傍線部の内容説明。「世の中に名立たる九の君」を見てしまい、「かかる人を見て、ただにてやみなむや。いかさまにせむ」という思いに囚われた仲頼の様子を、簡潔に説明する。傍線部の「かしらもたげで」と「ふせる」を訳出し、「思ひ」を直後の「いとせむ方なくわびしきこと限りなし」をふまえて具体化すればよいだろう。

(四)

〔解答例〕

あて宮への思いで乱れる心でも、やはり妻のことがいとしく思われたので

〔内容分析〕

状況をふまえ言葉を補いながら傍線部を現代語訳する。「思ひ乱るる心にも」の部分には、とりたてて難しいところはない。あて宮を見て恋心に囚われた仲頼の「心」であることがわかるようにして、訳出していけばよいだろう。慎重に考えなくてはならないのは、「あはれに」の解釈である。

整理しておこう。仲頼は妻を「になくめでたし」と思い、「かたときも見ねば恋ひしく悲しく」思うくらいだったのだが、あて宮を見て帰ってくると、妻のことなど「ものともおぼえず」「目にも立たず」という気持ちになってしまった。そうした様子を見て妻は、「あだごとはあだにぞ…」という歌を詠んだのである。その歌を聞いて仲頼は、「なほあはれに」と思い、「浦風の…」という歌を詠じて、妻に「あがほとけ」と涙ながらに呼びかけた。以上の流れをふまえれば、「あはれに」の意も見えてくる。ここの「あはれに」を同情心と捉えて、「気の毒に思つて」や「かわいそうに思つて」と解釈してはならない。なぜなら傍線部に「なほ」があるからである。「やはり」というからには、「あはれに」は以前にも抱いていた心情と考えなくてはならない。あて宮を目にする以前、仲頼は妻を素晴らしいと思ひ、心底恋い慕っていた。その心情を思い起こして仲頼は「あはれに」と思わずにはいられなかったのである。

(五)

〔解答例〕

夫は私のために泣いているのではないと仲頼の妻は思つて

〔内容分析〕

問二と同様に「必要な言葉を補つて」現代語訳する設問。傍線部に特に注意すべき文法事項も単語もない(強いていえば、断定「なり」連用形の「に」くらいか)。したがって「泣く」の主語、「思ひ」の主語を補い、人物関係がはっきりわかるようにして訳出すれば、十分だ。なお「われによりて」の部分をもう少し文脈を考慮して、「私への愛情のために」や、「私に誤解されるような素振りをしたことを悔やんで」などと解釈することも可能である。しかしこの設問では(三)や(四)のように、「状況がわかるように」や「どのような様子」といった、より詳しい説明を求めるような文言が記されていない。したがって必要最低限の言葉(主語や目的語など)を補って訳せば、十分である。

【第三問】

予想配点	30 / 120点	時間配分の目安	30 / 150分
文章の種類／ジャンル	現代文・古文・ 漢文 ／ 評論・随筆・小説・物語・詩歌・ その他 （漢詩及び漢詩の説明文）		
【出典】	万里集九『梅花无尽藏』第一。 万里集九は室町時代の禅僧。『梅花无尽藏』は、その詩文集である。東大で日本人の書いた漢文が出題されることは、きわめて珍しい。また漢詩が出題されたのも、二〇〇一年度の李賀『蘇小小墓』以来である。		
【文字数】	約一五〇字		
出題形式	記述式		
小問別難易度	※問題難易度：C難問、B合否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す		
(一) A	(二) B	(三) A	(四) A
			(五) B

●内容分析&解答のポイント

(一)

【解答例】

友人から賛語を求められた絵の主題がすぐにはわからなかったから。

【内容分析】

傍線部の理由説明。筆者が友人が持ってきた「小画軸」を何ヶ月も壁に掛け、寝ても起きても「何図」なのか考えた理由を説明する。直前に「見需賛語。不知為何図」とあるから容易。

(二)

【解答例】

なんと趙抃の奏でる一張の琴の音色を思わせないか

【内容分析】

「わかりやすく」とあるから、適宜言葉を補いながら現代語訳をしなければならぬ。「豈非々邪」は基本句形。「非」に「ズ」という送り字が丁寧に付されているから、反語でなく詠嘆であることは容易にわかる。「なんとくではないか」と訳せばよい。問題は「一張琴」をどのように「わかりやすく」訳すかである。

まずは主語を確認しよう。言うまでもなく、直前にある「有大雅風声者」が主語である。すると傍線部は、「大雅風声」が何と「一張琴」を思わせるのではないかと言っている部分であることが判明する。そうであるなら、「一張琴」をそのまま「一張の琴」とするのではなく、「一張の琴の音色」などとするべきだ。さらに「一張琴」は趙抃が携えていったものであることをふまえれば、解答例のような解答を作ることができよう。

(三)

【解答例】

梅 長松 一亀

【内容分析】

「神廟之片言」とは、問題文の冒頭にある趙抃への言葉、「卿入蜀、以一琴一亀自隨、為政簡易也」である。この言葉と対応している「絵事」、つまり絵に描かれている形象を抜き出せばよい。まず「梅」は「花中御史」であり、趙抃が「鉄面御史」であることを表すと記されている。またくねくねと曲がっている「長松」は「大雅風声」を表し、「一琴」を想起させるとされる。さらに水上には浮遊する「一亀」が

描かれている。すなわち趙抃が「梅」、「一琴」が「長松」で表されており、それらが「神廟之片言」と対応していることを間違いないものとするために、「浮游水上」の「一亀」が点じられているのだ。

(四)

【解答例】

琴

【内容説明】

漢詩が七言絶句であることをふまえ、押韻を確認すればよい。偶数句末にある「音(イン)」「心(シン)」と同じ音の語を本文中から見つけ出す。また内容面から考えても、第一句で「[d]」を置かないことを怪しむな」と言い、続いて第二句で、その代わり「長松が毎日残響を送るから」とあることを読み取ることができれば、「琴(キン)」を見つけることはさほど難しくはないはず。

(五)

【解答例】

趙抃の、一方で役人として剛直でありながら、他方で琴の音色を楽しむ風流を忘れなかった心。

【内容分析】

漢詩の解釈をふまえて傍線部の内容を説明する問題である。まず第三句と第四句の内容をまとめると、「剛直な主人にどのような楽しみがあるのか、ただただ一亀にこの心を知らせるだけである」といった意したがって傍線部が「主人」(＝趙抃)の心であることは一目瞭然。あとは趙抃にどのような「心」＝「樂」があったのかを、第一句と第二句をふまえて説明すればよい。第二句にある「長松」は、筆者によれば「一琴」を表しているのだから、「長松毎日送遺音」とは、すなわち「毎日琴を奏でて、その音色を楽しむ」といった意で解釈しなければならない。「不置琴」であっても、「長松」が「一琴」の代わりをつとめているのである。

【第四問】

予想配点	20/120点	時間配分の目安	35/150分
文章の種類/ジャンル	現代文・古文・漢文 / 評論・随筆・小説・物語・詩歌・その他		
【出典】	馬場あき子「山羊小母たちの時間」。 日本文藝家協会編『ベスト・エッセイ2008 不機嫌の椅子』 (光村図書出版、二〇〇八年六月) 所収。		
【文字数】	約二〇〇〇字		
出題形式	記述式		
小問別難易度	※問題難易度：C難問、B可否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す		
(一) A	(二) A	(三) A	(四) A

●内容分析&解答のポイント

(一)

【解答例】

土間から上がり框を経て奥座敷に至る家の造りは、寸暇を惜しんで農作業に従事していた賑やかな時代を想起させるといふこと。

【内容分析】

傍線部の内容を説明する設問である。「段差のある家の構造」と「農業が盛んだった頃の「風景」という部分を、それぞれ説明すればよい。前者については、前段落に記されている家の造りについての説明を、わかりやすくまとめる。後者については、傍線部直前の「休息の湯を飲む忙しい日の手伝い人」や「すぐ立てるように片膝を立てて坐っている若い者」がいた風景を、簡潔にまとめれば十分である。

傍線部直後の「戦後六十年以上たつて農村はまるで変ったが、家だけは今も残っていて」という部分をふまえ、字数に余裕があるのなら、「農業が衰退して一見寂しくなった現在の風景と異なり」といった一節を説明に加えたいところだ。しかし現在との対比を織り込もうとすると、小さな字で解答欄を埋め尽くすか、解答欄の大きさを無視してはみ出して説明してしまうか、そのどちらかになつてしまう。もちろん、これらは記述答案では厳禁。絶対にやってはいけない。解答例では、賑やかでない現在と賑やかだったかつてという対比を少しでも示唆しようと、「賑やかな時代」という一節を加えてみた。

(二)

〔解答例〕

自分を見守る祖霊に囲まれていると感じる山羊小母は、祖先へと溯る広がりの中で生きており、孤独を感じるなどないということ。

〔内容分析〕

傍線部の内容を説明する。まず「温とい思い出の影がその辺いっばいに漂っている」については、傍線部の前にある「この家の中にはいっばいご先祖さまがいて、毎日守っていて下さるんだ」という山羊小母の言葉や、それをふまえた「家の中のほの暗い隅々にはたくさんのお祖霊が住んでいて」を活用する。傍線部の次の段落にある、「山羊小母の意識にある人間の時間はもつと長く、前代、前々代へと溯る広がりがある」とも、筆者によるまとまった説明だけに、解答に織り込んでおきたい。

次に「かえって安らかなのである」という部分について。筆者の「さびしくないの」という問いかけに対し山羊小母が「なあんもさびしくないよ」と返答した。その言葉が考察を促し、筆者は「かえって安らかなのである」と結論づけたのである。山羊小母が「ちんまりと坐っている」空間を、「都会育ち」の筆者は「がらんどう」に感じ、一人でいる山羊小母の寂しさを想像した。しかし山羊小母にしてみれば、その空間には「ご先祖さま」が充滿しており、決して一人の寂しさなどを感じることはないのである。以上をふまえれば、解答例のような説明を作るのも、さほど困難なことではないだろう。

(三)

〔解答例〕

何世代にも渡って生き生きと語り伝えられてきた人間の時間の安らかさから逸脱し、継承されず個人で完結してしまう生涯を終えたということ。

〔内容分析〕

傍線部の内容説明。「こんな村の時間からこぼれ落ちて」という部分と、「都市の一隅に一人一人がもつ一生という小さな時間を抱いて終わった」という部分を、それぞれ本文をふまえて説明すればよい。前者については、傍線部直前にある「列伝のように語り伝えられる長い時間の中に存在するからこそ安らかな人間の時間なのだ」という一節に着目する。「列伝のように」という箇所については、第八段落にある「生きた人間の貌や、姿や、生きた物語とともに伝えられてきた」という一節が参考になるだろう。要するに「こんな村の時間」とは、村の老人たちが生き生きとした具体的な姿をもって語り伝えてきた「前代、前々代へと溯る広がり」のある時間のことなのである。

後者の「都市の一隅に…」という部分については、「村の時間」との対比から類推すればよい。連続と継承され祖先とつながる時間に対し、筆者の父が抱いたという「小さな時間」とは個人個人で完結してしまい継承されることのない時間なのである。

(四)

〔解答例〕

住民が都市に流出し農村が変化する中、村の老人たちが語り伝える安らかな生の時間を受け継ぐものもいなくなり、忘却されつつあるから。

〔内容分析〕

本文全体をふまえて、傍線部の内容を説明する設問。まず傍線部の内容を確認しておきたい。「それ」という指示語はむしろ傍線部直前にある「山羊小母たちが持っている安らかな生の時間」を指している。

すると傍線部が、村に連続と伝わる「安らかな生の時間」が「伝説的時間になってしまった」ことを危惧している内容であることがわかる。では、なぜ「伝説的時間」と化してしまったのか。

あらためて傍線部直前を見直してみると、「私も都市に生れ、都市に育って、そういう時間を持っているのだが」とあることに気づく。つまり奥会津に「いなか」を持ち、山羊小母という親類を持つ筆者に

して、すでに都市の時間しか有しておらず、「安らかな生の時間」を受け継ぐことなどできないのである。

以上をふまえて本文全体を見渡してみよう。たとえば第五段落に、「戦後六十年以上たつて農村はまるで変った」とあり、山羊小母の「息子たちも都会に流出し、長男も仕事が忙しく別居していた」と記されている。すなわち老人たちが語り伝える「安らかな生の時間」を受け継ぐ者がいなくなっているのであり、それらは都市の時間に圧倒され、忘れられつつあるのだ。継承者がおらず、忘却の淵に追いやられているからこそ、山羊小母たちの時間は「伝説的時間になってしまった」のである。